

活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第9号/平成15年12月15日発行 青森県立保健大学広報誌



第1回青森県立保健大学学術研究集会(ポスター発表)



体育祭



海外授業(Melbourne City Town)



大学祭

C O N T E N T S

第1回青森県立保健大学学術研究集会……………	2	特別講義紹介……………	17
学生活動：大学祭、体育祭、献血推進活動、 ボランティア活動……………	4	健康科学教育センター活動……………	18
海外授業：イギリス、オーストラリア……………	8	研究活動紹介……………	20
国際交流：日韓学生交換交流事業、研修生紹介 ……………	12	大学院から……………	21
就職活動状況……………	14	サークル紹介……………	22
卒業生から……………	15	人間総合科学演習ゼミ論集紹介・学内研究者著書紹介 ……………	23
ニュース：公開講座、日本看護歴史学会……………	16	人事異動・編集後記……………	24

第1回青森県立保健大学学術研究集会について

学術研究集会実行委員長（健康科学研究センター研究開発科長） 田崎 博一

第1回青森県立保健大学学術研究集会が9月27日、本学A棟111講義室において開催されました。この学術集会は、本学教員や学生、地域の保健医療福祉専門職等の研究発表の場、あるいは研究活動を通して職種や立場を越えて交流できる場となることを期待して、本学健康科学研究センターが主催して開催したものです。今回は「保健・医療・福祉の向上をめざして」という基本テーマを掲げました。

演題募集に対して教員および大学院生より合計18題の応募をいただきました。また、「子どもの心を育む環境とは」というテーマでシンポジウムを企画しました。



開会挨拶をする新道学長

当日は、新道学長から集会会長としての開会の挨拶があり、この集会が将来、学術学会に発展することへの期待が述べられました。学内外から100名弱の参加者があり、各発表ごとに熱のこもった質疑が交わされました。

近年、専門分野、領域ごとに学会や研究会が開催され、研究発表もそのような場で行われるのが常となっている中で、自分の専門外の研究発表をじっくり聞くことのできたこの集会は、ある意味、非常に新鮮な体験でした。発表者にとっても、専門外の人にも理解できるように説明することは意味がある試みだろうと考えます。このような機会を通して広い視野を持つことは自らの教育や研究

にとっても有益であると、あらためて感じました。以下、シンポジウムと一般演題の概要を記載します。

シンポジウム 「子どもの心を育む環境とは」

現代社会には育児不安、児童虐待、学力低下、不登校、いじめ、校内暴力、ひきこもり、あるいは出会い系サイト、性暴力、薬物乱用、拒食・過食、さらには少年犯罪等々、子どもたちをめぐる実にさまざまな問題があります。こういった問題が報道されるたびに、同じ年齢の子どもを持つ親は、「うちの子は大丈夫かしら」と不安をよぎらせます。多くの方は、これらの問題の背景にある何かを直感し、それが自分や家族と無関係ではないことに気づいています。「どうやって子どもを育てればよいのか」、これは、子を持つ親が共通して抱いている問いであり、また同時に社会に課せられた命題でもあります。

中村由美子助教授は乳幼児を持つ家族を対象に実施した家族機能に関する調査研究の結果を報告し、子どもを育てている家族にとって「家族間のコミュニケーション」、「家事」、「家族内ルール」が家族機能として重要であり、さらに、個人の「アイデンティティ」や「プライバシー」も機能の重要な部分を占めていることを指摘しました。



シンポジストの佐藤正昭教授

佐藤正昭教授は高等学校での教育実践と教育行政の豊富な経験を踏まえ、「生徒指導」とは本来、成長したいという子どもたちの欲求を援助する活動であり、すべての子どもたちを対象とした、教育活動全般において発揮される機能であることを述べました。効果的な指導には、①子どもの内面理解と信頼関係構築、②教師の協同指導体制、③家庭や地域社会との連携が重要であり、それらの課題に取り組んでいる現状について、自らの経験を含めて報告されました。

入江良平教授は「モダニズム、ポストモダニズム、そして生きる力」と題して、「自立した理性的主体としての自我」を追求する合理主義的手法と、それに対峙する「内面化された権力による自らの規制は生命の根源からの疎外」であるとするポストモダニズムの主張とを止揚した地平に「生きる力」を見いださうのではないかと、論を展開しました。

一般演題

【口述発表】

1. 山田典子(看護学科)：老人保健法に基づく機能訓練事業の意義の再検討—保健師の役割と参加者の自己評価より—
2. 杉山克己(社会福祉学科)：老人保健法に基づく機能訓練事業における「機能低下」群の分析
3. 大和田猛(社会福祉学科)：介護保険制度におけるケアマネジャーの実態—青森県在宅介護支援センターの職員の業務実態調査の分析を通して—
4. 鈴木保巳(社会福祉学科)：地域福祉情報提供システムの実態と課題—国内自治体における社会福祉施設等情報提供サービスに関する調査を通して—
5. 福田道隆(理学療法学科)：青森県における乳児死亡の実態調査—統計分析による考察—
6. 川原田里美(大学院生)：障害をもつこどもの学校生活適応—一人のこどもへの支援を通して学んだこと—
7. 吉岡利忠(理学療法学科)：心拍の微妙な動揺と心拍数から得られる二次元軌跡図について
8. 井澤弘美(人間総合科学科目)：ディーゼル排気微粒子によるアリル炭化水素受容体の活性化を

低減させる食品成分の検索

9. 千葉たか子(社会福祉学科)：貧困からの第一歩—インド国西ベンガル州の農村女性を対象とした開発プロジェクト—

【ポスター発表】

1. 野澤めぐみ(大学院生)：自然発症高血圧ラット(SHR)と脳卒中易発症ラット(SHRSP)における血圧変化と血液レオロジーとの関連についての研究
2. 小原麻智子(大学院生)：ディーゼル排気微粒子によるマウス精子産生能力の低下作用
3. 村松仁(看護学科)：青森ヒバの香りの精神面への効果—EEGの変化による検討—
4. 岩月宏泰(理学療法学科)：3年間にわたる「雪国の健康」に関する研究の総括と残された課題
5. 前野竜太郎(理学療法学科)：在宅障害者における積雪期の生活実態と危機管理意識について
6. 盛田寛明(理学療法学科)：過疎地域における訪問指導の効果に関する前方視的研究
7. 三浦雅史(理学療法学科)：スポーツ外傷予防に関する取り組み—1999年から2002年までの活動報告—
8. 李相潤(理学療法学科)：部分的な温浴と交代浴が心血管反応に及ぼす影響—身体組成からの考察—
9. 山田典子(看護学科)：スリランカ国結核対策の現状



ポスター発表の様子

協力し合う大切さ

大学祭実行委員長(看護学科1年) 福永 健治

今回の大学祭が終わって「充実感に溢れている」というよりは正直「無事に終わってホッとしている」というのが本音です。それは自分のいいかげんな考え方や、今までも何とかこなしてきたし、きっと何とかなる、と思ってしまう性格ゆえに大学祭の直前、本番当日まで様々なトラブルや迷惑をかけてしまったからです。本当にたくさんの人に迷惑をかけてしまったし、大変だったことがたくさんありました。でも、この第五回青森県立保健大学大学祭実行委員長をやることができ僕は本当に幸せでした。それは人と人との「協力し合う大切さ」を感じることができたからです。

知っている人も多いと思いますが、今年度の実行委員は全て1年生でした。もちろん、1年生だけで今年はやると決めた以上今年は「1年生だから」という言い訳や弱音を使うことはダメなことであるとは思っています。今までの大学祭で今年の実行委員が一番頑張ったし、大学祭を良くしたい、みんなに来て楽しんでほしいという気持ちがあったと思います。しかし、今年の準備は本当に大変でした。人数も足りませんでした。でも、僕たちが困っているときに支えてくれたのは同じ1年生の学生や、先輩方でした。特に大学祭1週間前からは実行委員でない1年生が大勢手伝ってくれて本当に助かったし、企画の色々な面で先輩方にお世話になりました。簡単な言葉しか浮かんでこないけれども本当にうれしかったです。たくさんの人たちの支えによって大学祭が成功できたのだと思います。もちろん今回の大学祭で反省すべき点、見直す点はたくさんあります。来年もきっと僕は大学祭に関係する何かをやりたいと思っているし、今年の反省点を生かして今年以上の大学祭になるようにしたいと思っています。

そして僕が一番言いたいことは、この保健大学の大学祭にもっと保健大学の学生の皆さんに来てほしいということです。きっと大学祭に来れば何か少なくとも一つは楽しいことがあると思います

ので、ぜひ来年は来たことのある人もない人にもご来場してほしいと思います。最後に、今回の大学祭の実行委員みんな、手伝ってくれた人たち、大学祭に来てくれた人たち、応援してくださった先生方、事務局の方々にお礼を言ってこの文を終わりたいと思います。

「本当にありがとうございました！」

大学祭を終えて

副委員長(看護学科1年) 古澤 菜子

初めての大学祭を終え、今思うことは、本当によい大学祭であったということである。1年生だけで初めから終わりまでを作り上げ、多くの努力と苦労の中で出来上がった大学祭を、今誇りに思う。多くの企画と模擬店、敷地内の色鮮やかな装飾、目を引くポスターと宣伝活動など、どの面からみても去年に劣るものはない。今年初めて取り組んだ企画として、子供に大反響であった縁日や、学生に絶賛された女装コンテストなどもあり、盛大に終わることができた。これもみんなの協力があったからである。

しかし、実際には様々な問題があった。1年生だけが集まった実行委員で、何からはじめ、何をしなければならぬのか、まったくわからないまま日にちだけが経ってしまい、実行委員長に頼りきりになってしまっていた。このことは実行委員全体として反省すべき点である。また少数の実行委員で活動し全体に連絡が行き届かなかったり、確認不足のことや詳しい内容の話などがなかったことで、当日の全体の混乱とあわただしさが起こってしまったのだろう。

だが、大学祭を終えすべての実行委員や学生たちは、本当に良くがんばった、すばらしい大学祭であったと口にはしている。もっと何かしたかったという意見の中からは学生自身のやる気と積極性も感じられる。私たちが多くの時間を費やして準備してきたことは結果として学校全体の大きなすばらしい何かにつながったのではないだろうか。来年は教員の先生方や学生全体が参加できるよう、よりいっそう良い大学祭を考えていきたいと思う。



人気の健康測定コーナー



中夜祭から～保健大のウォーターポーズ

この気持ちを忘れずに

企画長(看護学科1年) 山口 真一

「保健大の大学祭は面白みに欠ける。」ということ先輩方から耳にした。そして、今までより面白く、盛大な大学祭を作ろうというのが今回の実行委員の大きな目標となった。今年の実行委員は、数人の先輩の協力があつたものの1年生が主体という厳しい状況だった。当然のように大学祭までの準備は思うように進まなかったが、1年だけということがかえって強い団結力を生み、例年以上に盛り上がりたりもしたのではないだろうか。それぞれが出来ることを分担し、協力する。いつもふざけ合っている友達から何となくいつもと違った雰囲気が出ていたように感じられた。普段は見えていなかった一面を垣間見ることが出来たり、新しい部分を感じられたりした気がした。徹夜が続くこともあったが、準備をしながらのおしゃべりなど楽しかったと思う。始めは今年のテーマである「グッと青春」という言葉が自分の中でしっくりこなかったが、今思うと必死に準備してきた実行委員のみんなはそれぞれが思っている以上に青春していたと思う。この気持ちを忘れず、来年の大学祭では後輩を引っ張っていく私達がたくさんいることを期待したい。また、まだまだ未熟な私達を引っ張っていつってくれる先輩方が現れることも期待したいと思う。なにはともあれ今年の大学祭は問題が多少ありつつも成功だったのではないだろうか。大学祭に来ていただいた方が少しでも有意義な時間を過ごしたと感じてくれれば行事を催す立場として幸いである。

最後に、大学祭に限ったことではないが、保健大がもっと大きく成長していったほしいと思う。年々大学が有名になっていく中、学生の活動も活発になってほしい。今回、大学祭という形でそれに貢献できたことを大変うれしく思う。来年も更に進化した大学祭になってほしい。今年の大学祭に協力していただいた先生方、教務学生課の方々、実行委員のみんなには感謝してもしきれない。そして、来年も是非色々な形で協力していただきたいと思う。



どれも人気の模擬店

大学祭を振り返って

広報長(社会福祉学科1年) 奥谷 まき

準備から始めて、本番の大学祭までの期間は驚くほど短く感じられた。一回目に実行委員が集まったときはその少なさに大学祭が成功するかどうか不安だった。しかし皆の呼びかけのおかげでかなり多くの人数が集まった。だが、去年の経験者である2年生がちょうど実習期間だったため、1年生のみの委員での準備が始まった。私は広報を担当した。広報の仕事とは、企業回り(パンフレットに載せる広告を集める)や大学祭の内容を告知するなどだ。広報に集まった人数は私を含め14人。去年より多くの人数が集まったが、企業回りなどしたことがないため、初めの内は多くの戸惑いがあった。ほとんどが市外または県外出身のため企業の位置が分からないにも関わらず、夏の暑い中スーツを着込んで企業回りをして去年と並ぶ協賛金と企業数を得ることができた。企業からたくさん指導を受けたことは、これからの社会生活に役立つことばかりだった。企業周りを終えたとき感じた達成感は、広報を担当した人ではないと味わえない特別なものだろう。

もちろん、良いことばかりでなく反省すべき点も多々ある。パンフレットが出来上がるのが遅かったために、協賛していただいた企業に配る期間がたったの2日しかなく、十分企業に大学祭をアピールできなかったことが残念だった。また企画との連携が密に図れなかったため、広報に企画の内容が伝わらず混乱することがしばしばあった。もう少しお互いが連携の取れるネットワーク作りが必要だと思った。

今年企業回りやパンフレット制作で学んだことを来年につなげて行くことが、さらにより良い大学祭を作ることに結びついていくと思う。私たちは多くの先輩や先生方のご協力や助言のおかげで、大学祭を成功の内に収めることができた。大学祭に携わった全ての皆様には感謝したい。中でも、実行委員のみなさんの力添えがあつたからこそがんばることができた。本当にありがとうございました。



趣向をこらした後夜祭

体育祭という新たな一歩

体育祭実行委員長・学生自治会副会長
(社会福祉学科3年)
高橋 玄央

七月。私は、青森県立保健大学にある行事をたちあげました。誰もが筋肉痛になる体育祭です。以前より、学生から体育祭やりたいとの声が上がっており、自治会副会長である私としても、その声に応えるべく、そして自治会として活動したという足跡を残すために体育祭開催に踏み切りました。しかし、あまりにも唐突だったため、開催予定日までの日数も少なく、無謀ともいえる決断だったと思います。しかし、意外にも多くの学生が体育祭実行委員として集まり、形として成り立つこととなりました。そして私は、その実行委員会の委員長として体育祭に携わることとなったのです。

かくして、体育祭実行プロジェクトが始まったわけですが、体育祭開催までの道のりは、長く険しいもので、まさに前途多難なスタートとなったのであります……。その主な要因の一つとしてあげられるのは、私が実行委員長だったからです。根っからの能天気かつ楽天的な私は、当日まで日数がないのにも関わらず、みんなで楽しくできればいいや、くらいに考えており、危機感などはまったく持っていなかったからです。また、実行委員長自身、運動が苦手（特に球技）というのは、致命傷ともいえます。重ねて、今年度が初の体育祭ということで、前年度の例を参考にできないというのも要因として挙げられます。本当にゼロからの出発だったのです。いったいどのくらいの学生が参加してくれるのか想像もつかなかったため、種目、チーム分け等がなかなか決まらず、実行委員同士でもかなり意見が分かれるところとなりました。しかし、我々実行委員は妥協せず、徹底的に会議を重ね、だれもが納得するようなものを作り上げようと努力しました。この時期になると、さすがの私でも焦ってきたのか、体育祭成功のために全力を尽くし働きました。それは誰が見ても実行委員長として相応しい姿だった……。と言って欲しかったです。

そして、度重なる会議の末に体育祭の内容は決まりました。種目は、バスケットボール・バレーボール・ドッジボール・綱引き・長縄跳び、そして大ジャンケン大会です。もちろん目玉企画は大ジャンケン大会でしょう。盛り上がることこの上なし。また本心を言うならば、サッカーや野球、リレーなどグラウンドを使用する種目も行いたかったのですが、今回は第一回ということもあり、体育館のみで行い確実に成功させようということになりました。消極的といわないでください。私たちは堅実なのです。

チームは最終的に学科別になり、看護学科のみ人数の関係で2チームにわかれ、計4チームで行うことにしました。そして参加者数は約100人です。試験前にも関わらずこれだけの人が集まってくれたのは奇跡としか言いようがありません。本当に感謝しています。

いよいよ当日。一般学生の集合時間が朝9時20分。土曜日なのに早起きしなければならないという苦しい中、参加する勇者達は続々と体育館という戦場へ集結しました。私はその勇気と希望に満ちた表情をみて、開催してよかったと心から思いました。彼らのためにスムーズな進行を誓ったのもこの時です。

各種目における、参加者達の勇姿は今でも脳裏に焼き付いています。すばらしい熱戦の連続でした。現在おこなわれている日本シリーズの熱戦をみると、私は体育祭を思い出すほどです。中でも、予想を反して、圧倒的な強さで優勝した社会福祉学科チームはまさにこの巨大な優勝トロフィーが似合う歴史に残るチームだったと思います。

この体育祭を通じて、私自身の成長にも繋がりました。行事やイベントをゼロから作り上げるということの難しさを身を持って体験しました。大変未熟な実行委員長だったとは思いますが、ともに体育祭を作り上げた実行委員、そして参加してくれた学生には本当に感謝の念が絶えません。皆と共に体育祭という新たな一歩を歩めたことを誇りに思います。また、学長をはじめとした教員の方々、教務学生課の方々、ご協力ありがとうございました。最後に、来年度以降も、保健大学の伝統行事として体育祭が行われることを心から願っています。



写真左：高橋実行委員長
写真右：大友自治会長



ドッジボール



学長杯・優勝トロフィー

全国学生献血推進活動について

看護学科3年 酢谷 苑香

「献血のボランティアをしませんか?」と聞いて、自分の血液を提供することだけを考える人は多いと思われます。もちろん、自分の血液を提供することは、誰にでもできる身近なボランティアであり、ぜひ行ってほしいことです。しかし、それだけではなく、献血活動を推進していくボランティアもあります。それが、全国学生献血推進ボランティアです。この言葉を初めて耳にする人も多いと思われます。実際、私もこの活動に携わるまで知りませんでした。

血液センターでは、“県内で使用する輸血用血液は県民の血液で”を合言葉に献血活動を行っています。青森市は輸血用血液が足りなく、毎月のように他県から血液を提供してもらっているのが現状です。私たちが行っている活動は、市内で行われる街頭献血の呼び込みをしたり、ボランティア募集をしたり、青森市、東北ブロック、また、全国で行われる会議に参加したりして献血活動に協力しています。

毎年12月には、冬場の血液不足を補う手助けをすることを目的として活動している学生献血推進ボランティアが主催し、全国一斉に展開される「全国学生クリスマス献血キャンペーン」が実施され

ています。期間中は、全国各地で学生のアイデアをこらしたユニークなイベントが行われます。このキャンペーンは、学生献血ボランティアが主催することで、これからの献血を担う若年層の献血者を増やすことを目的としています。また、キャンペーンを展開することにより、献血の必要性和学生による献血活動の意義を理解してもらうことを目標としています。

今年、青森県では、12月23日に青森市、下田町、柏村の3ヵ所でのこのキャンペーンが行われます。献血者の呼び込みや自ら献血を行うなどして、皆さんもこのキャンペーンや普段の活動などに様々な形で参加してみませんか?



昨年青森市で行われた全国学生クリスマス献血キャンペーン

飛び出せ! オープンカレッジ in あおもり 社会福祉学科1年 加藤 理沙 (サークル「めいと」)

みなさんは『オープンカレッジ』をご存知ですか? 今年の5月から保健大で行われている、知的障害者と健常者が共に学んでいこうという卒業教育の機会のことです。何度か「めいと」でサポーターの募集を行っているので聞いたことがある方もいると思います。

これまで知的障害者には卒業教育(養護学校を卒業してからの教育の場)についてあまり保障されていませんでした。そこに注目して知障者の教育を受けられる機会を創り、健常者とのふれあいの場を増やそうと始まったのがオープンカレッジです。

オープンカレッジはもともと平成9年に大阪から始まり、全国に広がりました。青森県では平成12年に五所川原で行われたのが最初です。青森市では昨年「ドアドアらうんど兼青森」という知的障害者の親の会と弘前大学の学生ボランティアを中心に始まり、2回目からは保健大生もサポーター(受講生が講義を受けやすいようにサポートをしたり受講生の話し相手になる等)として参加するようになりました。そして、今回の6回目から保健大生が学生スタッフとして企画の段階から参加することになりました。オープンカレッジにはさまざまな講座があり、恋愛論講座には毎回多くの受講生が集まらます。後日集計したアンケート

には受講生・サポーター共に“楽しかった、また参加したい”という声が多く、今回のオープンカレッジは成功したのではないかと感じました。中には“自閉症者に対する接し方がわからず戸惑った”“同性介助に困った”等の意見もあり、次回の課題が多くあげられました。スタッフを経験したこと、サポーター・受講生の正直に感じた意見を受け止め、改善する努力を怠ってはオープンカレッジが成立しないと思ひました。また“障害者に対する偏見が無くなった”“自分と全然差がないと思ひた”等、前向きな意見も聞くことができ、参加した全ての人にとってプラスになったのではないかと思ひました。

今回は企画に関わるといふ大変さを知る良い機会になりました。このオープンカレッジはサポーターがいてはじめて成立するものだということも学びました。私はこれからもオープンカレッジに関わっていきたくて思ひましています。そして、参加した全ての人にプラスになるようにしていきたくて思ひましています。

来年の初めに7回目を予定しているのでサポーター・スタッフやりたい!という方は「めいと」に連絡ください。たくさんの保健大生の参加をお待ちしています!

英語海外授業について

総括：人間総合科学科目教授 赤坂 和雄

開学以来から続いている海外授業English Communicationは、昨年まではオーストラリアのモナシュ大学だけの授業であったが、今年度からはイギリスの Brighton での授業が追加された。学生にとってはイギリスかオーストラリアでの英語学習で選択する国が増えたわけだ。



語学の勉強といえば、成田から飛び立つ飛行機の中から緊張が始まる。特に機内におけるアナウンスは日本語だけではなく、英語での案内もスピーカーから流れてくる。航空機が外国の機種であったりすれば、最早日本語でのアナウンスはなくなる可能性がある。英語学習はもうすでに成田を飛び立つ時から始まっているのである。

今まではクラスだけの英語授業だったのが、目的がはっきりし、どうしても英語を使用しなければ自分の思うことが出来ない事態に出くわす。そんな経験の積み重ねでクラスだけでは味わえなかった諸々の体験を通して英語に習熟していく。考えてみればこれが語学習得の自然な形であろう。

英語にも色々な種類があり聞きやすい英語もあれば、聞きにくい英語も海外では通用していることを、体験を通して知ることが出来れば、海外授業の本来の価値ある意味を実感することが出来るのであろう。どんな英語でもいい、自分の言いたいことがまずくても100%言えて、相手の言うことが十分理解できるような語学学習はやはり日本を飛び出て行って色々な体験を通して習得するのが自然なすがたと言えよう。



Alfriston near Brighton



Royal Sussex Hospital, Brighton

English Communication Brighton, England

担当教員：人間総合科学科目教授 Alan W. Knowles

This year for the first time, a group of students from AUHW visited Brighton in England for the English Communication course. We stayed in Brighton for three weeks, and during this time students stayed with English host families and attended English classes at Eurocentres, a professional language-training center in the heart of the city. Here, they had classes with students from all around the world.



Our students responded well to this international environment, and they made excellent progress with their English. I congratulate them on the active, positive attitude which they displayed throughout their stay.

Brighton is a lively city by the seaside, less than one hour from London, and we were fortunate to have sunshine and blue skies almost every day. Our students made the most of their free time as well as their studies. They all visited the countryside around Brighton, they saw the sights of London, we visited France for a day, and there was time for individuals to follow their own interests (music, theatre, museums, soccer, etc.). On the final day there was an optional tour of a large teaching hospital.

This was a rich experience for all those who took part, and it was rewarding to see our students growing in confidence and learning to be independent

in a foreign country. My hope is that this will help to prepare them for international contacts of all kinds.



Seven Sisters, near Brighton

海外授業を終えて

看護学科2年 菊地 裕子

医療系の大学で海外授業を行うのは保健大くらいではないでしょうか？でも、日本を出て、いろいろな事を体験、吸収することで、自分自身とても成長できたのではないかと思います。海外を知るといふ事は、日本を知ることだといふのも改めて感じました。

イギリスのブライトンは、海岸沿いの街で、どこを見ても建物や景色がきれいなので感動しました。小さい遊園地があったり、雑貨屋があったりと、暑いことを除けば、とても住みやすく、三週間という期間でちょうどよく満喫できました。ロンドンにもとても近く、友達とビッグベンやタワーブリッジなど間近で見ることが出来ました。

初めてホームステイ先を訪れた時、家族はとて



ホームステイ先の子どもたちと

も温かく私を迎えてくれました。英語は全然話せなくても、何とかなるものです。大事なのは文法や単語力ではなく、積極的に話そうとしたり、行動したりすること。三週間という期間はとても短かったけれど、家族とは気を使いすぎることもなく、とても楽しく過ごせました。今でも、時々Eメールのやりとりをしています。

機会があれば、今度は家族に日本を案内したいと思います。

理学療法学科2年 中 裕介

この短期留学を終えて何より思うのが、何事も経験をしてみるのが大切だということである。医療系の大学だけに、英語を海外で学ぶ必要があるのか、という声が聞こえてきそうだが、パブでイタリア人と二人でビールを飲んだり、拙い英語で話したりしてみれば、医療とか仕事とかに関わらず、普通に英語が必要なのではないかと感じることができる。お金にも時間にもかえられない経験を学生のうちにできて良かったと思う。

社会福祉学科2年 高津 美耶子

私は、社会福祉が進んでいるという理由からイギリスを選びました。しかし私が本当にイギリスを選んでよかったと感じたのは、一緒に行った人が2人ずつクラスに振り分けられ、イタリア・スイス・台湾・トルコといった他の国の学生たちと交流を図ることが出来たことです。英国人と話すのとは異なり、相手と知らない単語を教えあったりと、自分の英語が下手だと恥じることなく、積極的にコミュニケーションをとることが出来、本当に有意義な時間を過ごすことが出来ました。

社会福祉学科2年 市川 裕子

イギリスで体験してきたコミュニケーションについて。私は最後のテストの時にアラン先生からどんどん英語が出てくるね、といわれた。確かに行く前のミーティングの時や、イギリスについた初日に比べると私だけでなく、みんなのコミュニケーション能力が上がっていると思った。環境と、度胸、そして私たちの拙い英語を真摯に聞いてくれた友達やホストファミリーのおかげである。みんなと話せて本当に楽しかった。ありがとう！

“3 weeks is too short!”

担当教員：人間総合科学科目講師 Dennis Kelly

This was the overwhelming response from students on this year's English Communication course to Australia. Not only did this indicate to me that students were enjoying themselves and felt comfortable in their campus and homestay environment, but also that their motivation level to learn about a new culture and improve their English ability was high right up to our departure from Australia. Furthermore, the feeling I got from students is that they would love to go back to Australia or another country in the future to further their studies. Regardless of different levels of achievement in English ability (which were generally high), if the experience of living and learning in another country has helped to establish life-long learning habits, and opened their minds to accepting difference both within and outside their own culture then the course can be considered a success for all concerned. Professor Sato also joined us for 3 days in the second week and met senior Monash and AACE members of staff on several occasions. A good time was had by all and AACE look forward to meeting other AUHW staff in the future.



Language Class B - English debate



Graduation Ceremony

言葉の大切さ 看護学科2年 小林 成光

今回私は、3週間のオーストラリア海外研修へ参加することになりました。私自身海外へ行くことは初めてで、ホームステイすることも初めてでした。そのため飛行機には、大きな期待感と共に、不安と緊張を乗せてオーストラリアへ向かうことになりました。

オーストラリアに到着すると、私はたくさんの衝撃を受けました。自然が多い、道路が広い、まったくごみが落ちていないなど、全てが新鮮で、今まで住んでいたところとはまるで別世界でした。この感動にひたりながら興味津々にあたりを見てみると、私は一つのこと気づきました。それは、日本人がいない、ということでした。そんなことは当たり前のことなのですが、このことに気づいた私は、急にとつともない不安に襲われました。出発前、英語が話せなくても、気持ちやジェスチャーでコミュニケーションは何とかなると考えていた私は、飛行機の中で少しだけ英会話の本を見ただけで、勉強という勉強はしていません。本当に大丈夫だろうか？そんな言葉が脳裏をよぎりました。しかしそんな不安をよそに大学へ到着し、これからお世話になるホストマザーを紹介されました。すると案の定、その不安は的中してしまっただけです。初対面してすぐに、英語のあまりのスピードと迫力に圧倒されてしまいました。はじめのうちはホストマザーが言ったことを何度も聞きなおし、私にもわかるような文で話をしてもらいました。ボキャブラリーが少ないので、私自身も知っている単語を並べるだけの、間違っても会話といえるようなものではありませんでした。



Prof. Sato with the students at Monash University



Students attending a Nursing lecture



Language Class A- pair practice



Language Class A- question Time

10日くらい経つと、会話のスピードにはついていけるようになってきましたが、私は最後の出発の日まで、単語を並べての会話が多かったように思います。

研修を終えてみて、私はボキャブラリーのなさに最後の最後まで悩まされました。コミュニケーションをするにあたって、気持ちやジェスチャーも大切であるけれど、一番は言葉で伝えたいことを伝えるということだということを知りました。



待望の卒業式

海外授業を通して

理学療法学科2年
中村 明子

私は3週間オーストラリアのメルボルンに行ってきました。最初は、ほとんど日本語を使えない生活に戸惑っていましたが、段々英語だけの生活に慣れてきて、英語に抵抗がなくなってきました。3週間はとても短く、やり残したことがいっぱい、もっとオーストラリアにいたかったです。

私のホストファミリーは、Father、Motherと子供の3人家族でした。ホストファミリーはとても優しく、私が英語を理解できないと、できる限り簡単な英語で私が理解するまで話してくれました。しかし、英語で自分の気持ちを伝えることは難しく、思うようにコミュニケーションがとれなかったことを後悔しています。子供は8歳の男の子で、いつも私に話しかけてくれ、楽しい時間を過ごすことができました。今回のホストファミリーとの出会いを大切に、これからもホストファミリーと交流していきたいと思えます。

オーストラリアにいる間、週1回病院見学をしました。私は、医療システムは各国さほど違いはないと思っていました。しかし、今回、病院見学を通し、日本との違いを知ることができました。

さまざまな国の医療システムについて学びたいと思いました。

慣れない英語で自分の気持ちを伝えることは



ホストマザーと
別れの朝に撮ったもの

大変でしたが、日本では経験のできないことをオーストラリアでは多く経験でき、とても満足しています。

海外授業体験記

社会福祉学科2年
今 沙織

青森から、韓国、韓国からシドニー、シドニーからメルボルンまで、約12時間飛行機に乗り、メルボルンの空港に降り立った。このときは、英語がわからなくてもジェスチャーで通じるだろうという甘い考えを持っていた。いざ3週間お世話になる、ホームステイ先のお母さんと会うと、彼女の英語は早くて何を言っているのかわからなかった。そして通じなかった。最初の土日は、早くに日本に帰りたいたいということしか考えていなかった。言葉が通じないということは、こんなにもストレスが溜まるものなんだと実感した。

悩んでいたのも、最初の1週間だけで、後の2週間は、話すことはできなくても、相手の言っていることは、大体わかるようになっていた。それにホームステイ先のご飯はおいしいし、みんなやさしいし、日本よりいいのでは？とまで思うようになった。特に英語の勉強になったのは、テレビや映画である。すべてわかるわけではないが、今実際に使われている、生の英語の勉強になった。わからないところや今どういう場面？などという会話を家で、誰かに聞いてみるだけで、次の日に学校で使ってみるなどの実用性があった。また、みんな、週末は観光をした。泊りがけの旅行で、英語を話さなくていいので、いいストレスの解消になった。ただ道路を走っているだけで、日本と違うところは、かなりの数の羊や牛がいる牧場が多いということである。風景の違いだけでも、なぜか感動した。そんなこんなで、あっという間に、3週間が過ぎた。最後の日に、ホームステイのファミリーは、イタリアンレストランに連れて行ってきて、送別会を開いてくれた。とてもうれしかったし、もう別れなければならないのかと同時に悲しくなった。私がこの海外授業で勉強したことは、英語もそうであるけれども、ホームステイの家族の温かさ、そしてやさしさを感じた。



ホストファミリーと

日韓学生交換交流事業について

理学療法学科長 佐藤 秀紀

昨年、70年の伝統をもつ韓国名門総合大学であるインジェ大学校物理治療学科と本学科との間で、学科間の協定を結ぶことができました。

インジェ大学校は、韓国最初の公益法人である財団法人白病院にその基盤を置いており、医生命工学大学、医科大学、人文社会科学大学、自然科学大学、工科大学の5大学から成り立つ大学校です。協定校である医生命工学大学だけでも、物理治療学科以外に、作業治療学科、医用工学科、臨床病理学、生命工学科、食品科学科、産業安全保健学科の計7学科があります。

この学科間協定においては、キム学科長、本学の伊藤教授の力が大きいものでした。また、計画の立案から実施まで、本学李助手の存在と役割も欠かせないものであったと思います。

両学科における交流計画は次の内容です。

- (1) 教員の交流
- (2) 学術共同研究の実施
- (3) 学術上の各種の資料、文献等の交換
- (4) 学生の受け入れに関する協力
- (5) その他、両学科の教育・研究の交流の発展に寄与する事項

となっています。

学生の受け入れに関する協力ということでは、昨年度、今年度と2年間にわたり、韓国の学生4名を本学にて4週間受け入れ、本学学生4名をインジェ大学にて2週間受け入れてもらいました。

理学療法の歴史を世界的にみると、オランダは100年の伝統が、アメリカは80年、日本と韓国は40年くらいとなっています。その間に、日本では運動療法が、韓国では物理療法が理学療法を中心となってきたようです。

昨年度、韓国での病院見学で改めて考えさせら

れたことですが、韓国での物理療法主体の疼痛コントロールを重要視する姿勢は、大変見習わなければならない視点だとつくづく感じて帰ってきました。

わが国の理学療法は、その治療技術を欧米諸国から学んできた歴史的な経緯があります。そのため、わが国の理学療法士養成校での海外研修は、全国的に見てもいまだにアメリカなどへの一方向的な臨床実習でしかありません。しかし、国際交流という観点から考えると、相手校に受け入れてもらうだけでなく、相手校からも受け入れる、双方向の交流を目指すことこそが大切であると考えます。

学生には、理学療法の技術や知識のみならず、それぞれの国の文化・言語・生活などに関する知識を吸収して欲しいと考えています。特に、学生同士の交流や、ホームステイなどを通し、それぞれの国の姿を正しく知ることのできるよい契機になって欲しいものと考えています。

学生の受け入れに関する協力に対して、協定の中の、(2)学術共同研究の実施、(1)教員の交流といった内容については、今年度から一部には実施計画がありますが、今後引き続き検討していく課題として残っています。

大学の教育・研究を諸外国の大学とひけをとらない水準まで高めるためにも、学術情報の積極的な交流と、教員同士の交流が不可欠であると思います。

今後特別な事情が生じない限り、この交流事業を継続していくつもりです。これからも、本学国際科と連携を取りながら具体的な計画を進めていきたいと思っています。



黎明郷リハビリテーション病院のスタッフと韓国学生



韓国インジェ大学校にて本学学生

理学療法学科研修生：堤 カロリーナ さやか (パラグアイ出身)

聞き手：理学療法学科助手 前野 竜太郎



Q：こんにちは。きょうは、本学科の研修生である堤さやかさんをご紹介したいと思います。では、堤さん、自己紹介をどうぞ。

A：南米のパラグアイから来ました。研修員の堤さやかです。パラグアイ生まれのパラグアイ育ちですが、両親が日本人なので日本語はもちろん、日本のことはいろいろ知っているのではないかと思います。日本で困ったことといえば、日本語が話せて日本人の顔をしていることで、外国人だと分かってもらえず、何か質問すると変な顔で見られたことでしょうか。

Q：そうですね。堤さんは大変日本語がお上手で、というより全く支障なくお話できるので、そういった意味で逆にご苦労されることもあるのですね。

A：そうですね。パラグアイでもうちの中では常に日本語オンリーだったせいだと思います。両親は逆にスペイン語が話せなかったんですよ。

Q：そうですね。いろいろご両親もご苦労されたでしょうね。

A：はい、今でも外では身振り手振が多いです。

Q：うーん、ボディランゲージって大切なんですね。あ、さてところで、本題ですが、堤さんはなぜ、日本でそして本学で勉強しようと思われたのですか。

A：私は大学時代から高齢者に関わる仕事をしたいと思っていたのですが、卒業して自分の国に帰ってからもっと、必要性を感じました。特に私の育った日系移住地では、高齢者が増えており、脳硬塞の人や転倒して骨折した人などがかなりいます。ほかには身寄りのない一人暮らしの高齢者も何人かいたことに驚きました。

そこで、高齢者福祉制度の充実した両親の生まれ故郷である日本に行って勉強しよう、世界一の長寿国である日本で勉強して、よい部分をパラグアイに持ち帰ろうと思い立ちました。

Q：なるほど。堤さんは確かお隣のブラジルの大学をご卒業されてパラグアイに戻られたんですね。

A：はいそうです。パラグアイには理学療法学科を持つ大学が2つしかありません。そこで、学生は皆お隣のブラジルの大学へ入ります。

Q：なるほど。では保健大学を希望されたのは？

A：本学を希望したのは母親の出身地が岩崎村でしたので、青森県の高齢者福祉の現状も学びたいと思い、ここの大学を希望しました。

Q：では、日本での印象は？

A：日本は世界でも長寿国として有名ですが、やはり福祉制度がしっかりしていることを実感しました。

Q：現在はどのような勉強をされていますか。

A：現在は大学での勉強、そして協立病院で実習をしています。病院での実習では、リハビリのほかにデイ・ケア、デイ・サービスなどが見られとても勉強になります。あと文化の違いから出てく

る理学療法の違いなども見られとても興味深いです。

Q：現在はどのような研究をなされていますか。

A：大学では、高齢者に関する調査を行っているのですが、色々な施設を見ることができ、そして沢山の人が出会うことができ、とても良い経験になっています。

せっかく地球の裏側に来たので日本のいいところを沢山見ていきたいと思っています。そして同時にパラグアイのことも青森の人に知ってもらえたらと思います。

Q：そうですね。今は青森でどのような国際交流をされているのですか。

A：青森市や黒石市で開催している国際交流フェアでパラグアイのブースを出したり、保健大の大学祭でも千葉先生に呼んで頂き、少しパラグアイの紹介をさせていただきました。このような集まりでは、日本だけでなくほかの国の人達との交流もあるので、とても良い経験になります。(ちなみに黒石で一番楽しかったのは、黒石よささと黒石甚句の講習会で踊ったことでした。)

Q：学術研究も大切ですが、その国の文化を学ぶというのはもっと大切なことかもしれませんね。今「パラグアイのことも知ってもらえたら」ということでしたが、パラグアイという国について少しお聞かせ下さい。

A：パラグアイの好きなのは、皆家族のようなところです。これは、昔の日本にあったことだと思いますが、隣の子が親をなくしたら、簡単に養子にして育てたりします。私は首都のアスンシオンで勉強するために友達の家を下宿させてもらったときのことで、下宿代を払おうとすると“なんで払うの？一緒に暮らしてるだけだよ”と断られました。その子の家が決して裕福だというわけでもなかったのですが、自然に言うので驚きました。

Q：パラグアイでは高齢化社会は進んでいるのですか。

A：パラグアイ自体は、まだ先進国に比べると高齢者の数も少ないのですが、やはりこれからは、高齢化社会のことも考えていかななくてはけません。日本のように介護制度があるわけもなく、殆どが家で家族が面倒みることになります。身寄りのない人などは、修道院が経営する老人ホームなどに入ります。

Q：なるほど。なかなか厳しい現状ですね。これからはがんばってパラグアイのために日本での研究を続けて下さい。では、最後に堤さん一言どうぞ。

A：大学では沢山の先生方にお世話になってます。ご迷惑おかけすることばかりですが、あと5ヶ月間どうぞよろしく願います。

Q：ありがとうございました。

A：いいえどういたしまして。

第2期生の就職活動状況

第1期生の就職率が98.6%であり、目標としていた100%には若干届かなかったものの、先輩がいなく就職実績がない状況の中で、第1期生の健闘は高く評価できるものと考えます。

また、求人活動のために大学を訪れた人事担当者は第1期生を非常に高く評価しており、第2期生に対しても大きな期待を抱いていることから、大学としては素直に嬉しく思うとともに昨年度以上に充実した就職対策を行う決意で各種の事業を行っています。

【本年度の主な就職対策事業】

1. 第Ⅲ期公務員試験学内講座の開設

医療職（看護師、理学療法士）を目指す学生を対象に教養試験（一般知識、一般知能）対策を行っており、昨年度よりも合格率が向上しています。

《主な合格先》

- 青森県職員（看護師12名）、青森市職員（保健師1名）
- 八戸市職員（看護師3名）、三沢市職員（看護師2名）
- 岩手県職員（看護師4名）、静岡県職員（理学療法士1名）

2. 第2回就職合同説明会の開催

病院・社会福祉施設の人事担当者と学生（3・4年生）が直接面談して情報交換をする場を設定することで就職活動を効率的に行うとともに、県内定着率の向上を目指しています。

昨年度と同様、100数十名の学生が参加し、会場のC棟「コミュニティーホール」は熱気に包まれました。

《施設の出席状況》

- ※病院（24施設 51名）
- ※福祉施設（11施設 21名）

3. 面接・小論文試験対策

模擬面接、小論文試験の添削指導、面接カードの書き方等の個別指導を1人当たり複数回行っています。

指導の成果により、面接等に落ち着いて臨めるようです。



就職合同説明会の様子

第2期生の内定状況は次の通りですが、公務員試験の合格状況は昨年度よりも向上しており、民間の就職試験も難関と言われる施設に多数合格しています。

本年度は、是非とも就職率100%を達成し、第2期生全員を笑顔で卒業させなければ、と更に気を引き締めて第2期生と日々向き合っています。

【第2期生の内定状況】（11月21日現在）

学 科	卒業予定者（人）	就職希望者（人）	就職決定者（人）
看護学科	104	100	46
理学療法学科	19	17	4
社会福祉学科	41	41	8
合 計	164	158	58

助産師1年生

三田 景子 (看護学科1期生)

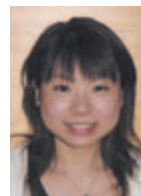


私は現在、岩手県立久慈病院で、助産師として産婦人科病棟に勤務しています。当院は、フリースタイル分娩に取り組んでおり、産婦さんが自分の楽な体位で分娩してもらっています。大学の実習では、基本的な仰臥位での分娩介助のみで、フリースタイル分娩のイメージがあまりわからなかったのですが、当院に勤務してから、分娩とはこちらが“生ませる”のではなく“自分で生む”ものだ実感しています。当院では無理に努責をかけたりせず、側臥位やよつんばいなどの体位をとる分娩がたくさんあります。分娩後に「楽でよかった」などの声が聞かれるととてもうれしく、やりがいを感じます。

患者さんは人それぞれで、教科書どおりにはいかないことが多々あり、また、うまくいかないこと、こうすれば良かったと、あとから後悔することもあり、日々学ぶことばかりです。まだまだ、臨床1年目で、わからないこと、不安なことだらけですが、先輩方にたくさん質問し、多くの患者さんに関わりながら経験を積んでいきたいと思っています。

就職してから思うこと

佐々木 梨香 (理学療法学科1期生)



就職して半年が過ぎました。私は今、病院の中で理学療法士として働いています。まだまだうまくできないことだらけで、一日一日をこなすだけで精一杯なのが私の正直な現状です。今は入院・外来の患者さんの他に通所リハにも顔を出しつつ、一日16~20人の患者さんを相手に悪戦苦闘しています。そんな中、いつも思うのは「学生時代、もっと勉強し、遊んでおけばよかったなあ」ということです。朝方まで友達と騒いだり、学校に住みつくぐらいの勢いで勉強したり。その時は大変だ、と思っても大学時代は何か夢中になれる最高の時期だったなあと思います。

臨床の現場では思うようにいかないことが多く、自分のふがいなさに落ち込むことも少なくありませんが、どんなに忙しい時でも苦しい時でも、大学時代に一緒にバカ騒ぎして一緒に苦しんだ友人達に助けられることはとても多いです。みなさんも自分のやりたい事は、遊びでも勉強でも思う存分やりぬいて下さい。私も、一日も早く一人前の理学療法士になれるよう頑張っていきたいと思っています。

生活保護業務に携わって

杉本 絵美 (社会福祉学科1期生)



現在、八戸市役所生活福祉課にて生活保護業務に携わっています。約100件のケースを担当しており、生活保護世帯への訪問等による生活状況の把握、生活保護についての相談援助が主な仕事になっています。生活全般に関わる仕事のため、火葬場や裁判所等思ってもいなかった場所に行くこともあります。また、思っていた以上に担当ケースの増減が激しく、相談者や生活保護受給者との面接のため窓口には座らない日はありません。担当ケースに起こる問題や市民からの苦情の電話、さらには仕事をしていくごとに感じる制度の矛盾などによりストレスを感じることも多くあります。しかし、仕事内容とは異なり職場は明るく笑いが絶えません。みんながストレスを感じているからこそ、お互いに相談し合い時には笑い飛ばしたり、飲みに行き発散することができ、そういう意味では楽しく毎日を過ごしています。また、様々な人との関わり合いの中で喜びを感じることも多くやりがいのある仕事だと思っています。生活保護に関する知識だけでなく多くの制度やサービスを知り理解することがこれからの課題だと思っています。

公開講座

本学公開講座委員会では、平成11年度の開学以来、毎年計4回の公開講座を実施しています。

今年度も「こころと健康」を基本テーマに以下のとおり実施しました。

《第1回目 6月2日(月)》

「胸にはエプロン、口にはシャンソン」

講師：平野 レミ氏（シャンソン歌手・料理愛好家）

《第2回目 6月20日(金)》

「豊かな体験と、感性の教育 ～子どもの生きる力を育む～」

講師：浅田 豊（社会福祉学科講師）

《第3回目 7月12日(土)》

①「リハビリテーション・マインドって、なあに？」

講師：福田 道隆（理学療法学科教授）

②「死に方も生き方」

講師：リボウィッツ 志村 よし子（健康科学教育センター国際科長、看護学科教授）

《第4回目 10月11日(土)》

①「子育てをしている家族の発達を考える～赤ちゃんから思春期までの家族のライフサイクルからみた子育て～」

講師：中村 由美子（看護学科助教授）

②「ともに生きることとは？」

講師：八戸 宏（社会福祉学科講師）



第1回目公開講座講師の平野レミ氏

〈日本看護歴史学会を終えて〉

大会長(看護学科教授) ライダー 島崎 玲子

2003年9月5日(土)、6日(日)に第17回日本看護歴史学会を青森で開催しました。この大会のメインテーマは、「看取りの文化 古代から現代へ」ということで、新村拓先生に興味深いお話を伺いました。約180人の参加者があり、特に男性の参加者が例年の大会に比べて増加しました。元来看護は、女性の職業とみなされてきましたが、今多くの男性看護師が、精神科看護のみならず、広い分野で活躍しています。今後、看護の専門職化を目指して男性の果たす役割について、検討していただきたく1つのセッションを設けました。

「占領軍公衆衛生福祉局の医療、看護政策と現在への影響」のパネルディスカッションでは、戦後の改革で、日本の当時の看護婦が「患者中心の看護」や、看護は「科学であり、芸術であり専門職」であるということを知り感動しました。そして戦前の「患者不在」の看護から「患者中心の看護」を目指して、涙ぐましい努力をしました。私は、そ

れらの理念が現在にも引き継がれているかどうかということに興味を持ちました。

私は米国で約25年を過ごし、帰国してから約17年になります。帰国後、伊勢原、倉敷、青森など、またつい最近、心臓の手術や検査で有名な病院に入院しました。しかし、私の受けた看護には何かしらもの足りないものがあると感じました。看護師さんの看護ケアはテキパキとして、戦後の看護教育の成果が現れているとは思いましたが、優しさとか心遣いに欠けているように思いました。このような体験から、もう一度看護のルーツ、戦後の看護改革の時代に還り「患者中心の看護」を思い出してという気持ちでした。また戦後の改革によってもたらされた制度は現状に合っているか、現状に合わせてどのように変革すべきか研究して下さる方が現れば、この看護の歴史学会は成功だったと思います。

看護学科

- 日時：10月1日（水）
- 場所：大講義室A2（A111教室）
- 講師：弘前福祉短期大学助教授 横浜礼子氏
- テーマ：「津軽ことばと看護の心」

講師の横浜氏は、「病む人の津軽ことば」「介護学生のための三つの津軽ことば」の著者です。

横浜氏は、病む人の津軽ことばについて、例えば、「痛み」には、「へづね」「やめる」「いで」「にやめぐ」「にやにや」「ささる」等様々な表現があることを話されました。また、病む人とのコミュニケーションでは、よく噛み砕いて聞く、腰を据えて聞く、手で触れて聞く、出向いて（足で）聞く、肌で聞く、五感で聞くなど、身体・五感を使って聞くことの重要性を話されました。学生は、病む人のた

くさんの津軽ことばに興味津々で聞き入っていました。



理学療法学科

- 日時：11月28日（金）
- 場所：大講義室A2（A111教室）
- 講師：秋田県厚生連仙北組合総合病院
リハビリテーション科技師長
菅原巳代治氏

- テーマ：「理学療法とチームワーク」

ご講演の内容は、理学療法士と他職種とのチームワークを5つの原理に分けてその意味を問い直すというものでした。職種間連携と役割遂行について等、これからの専門職になくてはならない大変貴重な内容の講演をいただきました。日没が早くなり、すっかり暗くなった時間帯にかかわらず、多くの学生及び教員の参加があり、盛況のうちに終了いたしました。



人間総合科学科目

- 日時：10月31日（金）
- 場所：大講義室A1（A101教室）
- 講師：南山短期大学教授 近江誠氏
- テーマ：「頭と心と体を使う英語の学び方」

講師の近江誠先生は、全国で活発な講演活動を行っておられ、スピーチコミュニケーションおよびオーラル・インタープリテーション等の分野では、広く活躍されている先生です。

本学の特徴である外国語に力を入れ、外国でも活躍できる学生を育て上げたいという人間総合科学科目の理念に合致した講演であり、多くの学生と教職員が参加され、大盛況に終わりました。

社会福祉学科

- 日時：10月31日（金）
- 場所：大講義室A2（A111教室）
- 講師：青森県社会福祉士会会長 杉野利久氏
- テーマ：「青森県の21世紀を担う社会福祉士として」

杉野氏は特別養護老人ホームの管理者を務める傍ら、社会福祉専門職団体の会長として県内外で様々な社会活動にも取り組んでいる方です。

専門職としての豊かな実践を基に、利用者主体へのかかわりを支える心・技・体、批判的精神を持つことと活動として展開することの重要性、新聞熟読を始めとして日常生活のなかでの学びの大切さなどについて語られ、また、ハンセン病元患者の支援や児童・高齢者虐待に対する専門職集団としての社会活動の展開が紹介されました。

参加者にとっては、自分の社会福祉専門職としての将来像を思い描きながら、これからの学びの目標や課題を考え、確認することができたひとときでありました。



健康科学教育センターだより

健康科学教育センター長 伊藤 日出男

教育センター研修科では今年度の事業として、教員に対する教育研究の助成と、県内の保健医療福祉専門職に対する生涯学習の支援を行っております。教育研究助成は通常の研究に要する費用とは別に、教材開発やテキスト作成、教育方法の工夫など教育面での研究に助成するものです。専門職の生涯学習への支援としては、教員から募集した研修企画に基づいて主に本学教員が講師となって研修会などを実施するものです。参加費は全て無料です。その他に教員の研究成果を県民向けに分りやすい表現にかえた、「ヒューマンケア・シリーズ」と銘打った年間3種類程度のブックレットを発行する予定です。

(1) 教育改善研究助成

7件の申請があり、研修科委員会による慎重な審査の結果、7件が採用となりました。申請者と教育改善課題は次のとおりです。

- ・看護教育における実習受け入れ施設との連携・教育基盤づくりに関する研究（看護学科・上泉和子教授）
- ・ケアマネジメント論演習のための教材開発（看護学科・石鍋圭子教授）
- ・「教育と人間」と連動し実践力向上を目指した新たな「健康教育論」の授業設計の模索（看護学科・山本春江教授）
- ・看護学概論 テキスト（看護学科・ライダー島崎玲子教授）
- ・発達援助実習Ⅱ（小児）における学生の子どもイメージ変化等の分析から効果的な実習体制を検討する（看護学科・吉川由希子講師）
- ・「生理学・運動生理学用語とその解説」のためのテキスト作成（理学療法学科・吉岡利忠教授）
- ・ロールプレイを中心とした講義テキストの使用によって理解しやすい講義を展開する（社会福祉学科・安田勉助教授）

(2) 専門職に対する研修企画

6件の申請があり、書類審査とプレゼンテーションによる審査により6件全て採用されました。研修名と申請者は次の通りです。

- ・家族看護研修（基礎コース）（看護学科・山本春江教授）
- ・「呼吸管理看護支援モデル」研修会（看護学科・小山敦代教授）

- ・家族看護研修（実践コース）—家族システム看護の実践—（看護学科・中村由美子助教授）
- ・看護職のためのトランスファーテクニック研修会“合気道スタイル トランスファーをマスターしよう”（看護学科・井澤美樹子助手）
- ・介護老人保健施設等で働く看護職に対する応急処置・救命処置研修会（看護学科・三浦博美助手）
- ・理学療法臨床実習指導者研修（理学療法学科・伊藤日出男教授）

(3) ブックレットの発行

前期募集分として2件の申請があり、2件とも採択されました。

- ・転倒を防ぐために—「転倒予防教室」テキスト—（理学療法学科・盛田寛明助手）
- ・青森県の健康を科学する—生活習慣病の予防をめざして—（看護学科・竹森幸一教授）

引き続き後期の申請を受け付けていますので、教員からの積極的な応募を期待しているところです。

(4) 公開シンポジウム開催

平成16年1月31日(本学において「ケアマネジメントの課題を探る」というテーマで「第3回ケアマネジメントフォーラム in 青森」を開催する予定です。



2003.9.22～26家族看護研修（基礎コース）

米国大学交流のための事前調査

健康科学教育センター・国際科長

リボウィッツ 志村 よし子

本学では既に理学療法学科が、韓国仁斎大学との交流を確立しております。今回は看護学科を中心として国際科が窓口となり、米国の3大学1施設の関係者約20名との話し合いを平成15年9月20日～10月3日の13日間に渡り行いました。

それらの目的としては、①看護学科の国際交流の可能性と課題について明らかにする②共同研究の可能性を探る③外国教員の招聘の可能性を探る④大学の国際科システムについて学ぶなどです。

訪問先は、米国東海岸、看護界のリーダーシップをとっているペンシルバニア大学、ベレノバ大学、エール大学、トーマスジェファソン病院です。これらの学長、関係者に青森県立保健大学を紹介しつつ教員、学生の交換留学の可能性について話し合いました。

(1) 国際交流の可能性について

3大学とも、積極的に本学との交流を望んでいた。①ベレノバ大学は、早々に平成16年から国際看護（選択）か地域看護の一環として短期研修を提案された。本学に対しては、特別研修プログラムを作成することが提示された。②エール大学では、GEPIN (Graduate Entry Prespeciality in Nursing)プログラムの2名の学生への、日本の地域看護の履修提案があった。このプログラムは、すでに他分野で、学士号を終了している学生を対象とした3年の課程であるが、一年目で看護学の学習を修了し、国家試験合格後の2年間で修士課程を修得するものであり、日米最初の試みとしてパイリンガルの学生をパイロットスタディとして送りだすことが提案された。エール大学は、本学のパメラ・ミナリック教授が看護学部国際科の担当であるため、本学側の準備が整えばスムーズにすすめることができると思われた。

大学院生・教員の研修に関しても、専門看護師達と討議し短期間の研修は、殆どの病院の部署で可能との返答を得た。

(2) 本学との共同研究について

エール大学では、本学が共同研究を望んでいる分野（家族看護、母性看護、ホスピス緩和ケア、クリティカルケア）の教授らと話し合った。その多くが、共同研究を望まれていた。

米国では、研究者間の調整の、奨学金、研究計画や海外との開発プログラムを支援するシステムがあり、大変羨ましくもあった。教員の臨床側とのユニフィケーションも、無理のない調整で行われていた。老年学の第一線であるペンシルバニア大学では、高齢化が世界一進んだ日本に多大の興味を示されていた。エール大学の前学長で名誉教

授であるフローレンス・ワード氏は、ホスピス緩和ケアをアメリカに普及した第一人者である。92歳になられるが、ご自分で車を運転し愛犬とともに会いに来てくださった。今もなお、囚人のホスピスケアの教育に関わっておられた。

(3) 外国教員の招聘について

お会いした多くの教員はわが国に来ることに非常に積極的であることがわかった。特にエール大学のキャシー・ギラス学長（家族看護）、ペンシルバニア大学のコター教授（老年看護学）は実現させて欲しいとの強い希望を示された。

(4) 国際科のシステムについて

本学で留学生を受け入れていくための準備に関して多くの示唆を得ることができた。

今回の訪問の収穫は、米国政府が異文化理解を推進し大学教育にも取り入れ始めているという事であった。したがって、どの大学も国際交流に積極的に対応してくださり、今後それぞれの大学の特徴と本学のニーズを検討し国際交流を進めていきたいと考えております。



米国の在宅ホスピス・緩和ケアのパイオニアである、92歳のフローレンス・ワード氏（エール大学名誉教授）を囲んでの夕食会。

左から、マコークル教授、上泉教授、ワード教授、リボウィッツ、ミナリック教授

特別講演会：「女性の権利と日本国憲法」 盛会だったベアテ・シロタ・ゴードン氏講演会

戦後の新憲法草案に女性の権利を盛り込むことに尽力されたベアテ・シロタ・ゴードン氏の「女性の権利と日本国憲法」と題する公開講演会が10月22日本学講堂において開催されました。看護学科の島崎教授によるご紹介のあと、シロタ氏は流暢な日本語で戦前に軽井沢で過ごした思い出や、新憲法草案作成の苦労話、棟方志功画伯との交流などについて約1時間講演されました。会場は弘前、八戸からの参加者を含め350人を越す盛況で、まさに歴史の生き証人としての氏の熱のこもった講演は参加者に大きな感動を与えていました

イカ墨の秘密

人間総合科学科目主任教授
松江 一



平成5年頃、イカ墨を使ったフランスパン、ラーメン、菓子、チーズ等のイカ墨食品が全国的にブームになった。特にイカ墨パンは行列ができる程の盛況ぶり、それまで富山の塩辛の黒作り、沖縄のイカ墨味噌汁などがあったが一般的な商品ではなかった。イカ墨食品ブームが何故起こったのかは、手前味噌になるが平成3年頃に、私達青森県産業技術開発センターと県内企業及び弘前大学佐々木甚一先生との、通称「イカ墨グループ」の産学官共同研究の成果が発信源であったことは確かだろう。

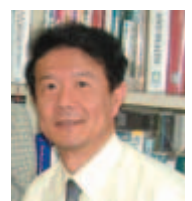
イカは刺身、天ぷら、さきイカ、燻製、塩辛、シーフードサラダ等に、日本人が好んで食する魚種（正確には軟体動物頭足綱）の一つである。日本のイカの年間生産量は全国的に約70万トン、一つの魚種でこれ程になるものは他に類を見ない。このため日本漁船はニュージーランド、アルゼンチン、フォークランド等の沖で漁業活動を行なっている。特に、八戸港には、年間約20万トン以上のイカが水揚げされており、外国沖で獲られたイカの90%は八戸港に水揚げされている。このため八戸には、さきイカ、燻製、塩辛等のイカ加工品を製造する企業が多く、青森県の特産品の一つになっている。しかし、イカを加工する際に、皮、骨、内臓、墨袋等、多量の加工廃棄物が出され、企業は経費をかけてこれらを廃棄しており、この廃棄物に何か有効なものがないかということが研究のスタートであった。

いつの世でも発見は思わぬところから出てくるもので、「イカ墨」グループでは、当初イカ皮のムコ多糖の研究を進めていたが、ある日イカ的全組織におけるムコ多糖の分布について電気泳動法で調べることになり、皮、筋肉、内臓、軟骨と調べが進むうちに、グループの内沢研究員が「墨を如何がしたら良いか」と言いだした。しかし、多糖の研究では幾分経験の長い小生ではあったが、まさかあの黒々とした墨の中に何か貴重な物質があるとは考えも及ばなかった。その翌日若い研究員達が「何か変な物質が墨の中にある!!」と見せた電気泳動のデータは「新物質だ!!」と直感させる、強い衝撃があった。何故なら、イカ墨のムコ多糖は従来のコンドロイチン分解酵素でいくら処理しても分解できなかったのである。研究生活の中で、胸が高鳴るようなチャンスに出会うことは極まれであり、多くの研究者はその快感を求めて、日夜実験という試行錯誤の繰り返しに取り組めるのである。

その後私達はイカ墨から新規多糖-(GlcA β 1-4(GalNAc α 1-3)Fuc α 1-3) n -ペプチド複合体を発見、これをイレキシシと命名、この糖鎖構造決定、これをガン細胞を移植したマウスに投与した所、約65%の治癒効果があることを見出した。これをきっかけに全国的にイカ墨を使った商品開発がブームとなった。現在もイカ墨を用いた商品は約20品目以上にのぼり、「イカ墨食品が定番」となった。特に糖鎖構造の研究では初めてのイカ墨博士が誕生した。その後、イカ墨汁メラニン合成酵素チロシナーゼがマイナス20℃で室温の30%も働く極低温酵素であることを発見、最後にクローニングにより全アミノ酸配列を決定し、今年二人目のイカ墨博士が誕生した。

デンプン、食生活そして健康づくり

人間総合科学科目教授
藤田 修三



学生時代から糖質エネルギーであるデンプンの栄養食品学的なアプローチをしてきました。それをベースに今、食生活からの健康づくりを考えています。

デンプンにはご飯やパンで無意識のうちにお世話になっており、タンパク質とともに食生活上で大切な成分です。その研究領域は化学構造や消化および代謝研究から、ご飯やパンをよりおいしく食べるための遺伝的、食品工業および調理科学的な研究までと幅が広く、医学、農学、理工学、生活科学が関連して学際的です。たかがデンプンされどデンプンというところでしょうか。さらに私の興味はデンプンから生分解性プラスチックの可塑性研究、食物繊維の機能性研究、またポリフェノール的一种であるリグニンの生理活性に関する研究へと広がっています。と申しますのはデンプンとそれらはポリマーという点で共通していて、化学構造により反応性は異なっても物理的性質は似ています。例えばモチに砂糖を加えて羽二重モチを作ると、プラスチックに可塑性を加えて柔軟性を高めるのは同じ結晶化阻害現象です。また難消化性デンプンは食物繊維の機能性をもっています。学ぶほどにデンプンから応用分野へと広がる科学の面白さに惹かれます。

一方、栄養学からの健康づくりにも目を向け、赴任以前から栄養および健康問題の委託調査をすすめながら、食生活を中心に健康問題を考えてきました。現在青森県民の健康寿命アップを推進する健康調査と取り組んでいます。生活習慣病に罹ってからでは、健康をとり戻すことは並大抵ではありません。そのため市町村の医師、保健師、栄養士さんと協力して住民の一次予防を積極的に推進しようという企画です。本年度は高脂血症改善をテーマに健康教室を開き、地域の皆さんと共に考え、意識を高めて問題を解決していきます。着任早々、研究体制が整わないうちのスタートです。何かと戸惑いを隠せませんが、本学の関連領域に携わる諸先生のご協力を得てなんとかすすめています。わが国ではご存じ「健康日本21」が推進されています。人生ただただ長生きすればよいというものではありません。QOL向上からの健康づくり、長寿社会づくりをめざしたいものです。

大学院、研究方法論を担当して

看護学科教授 竹森 幸一

「大学院は学生も教員も初めてなので」とは学生がいても、教員は決して口にはいけないうことなのです…。

研究方法論は4分野14領域の共通科目で必修です。3人の教員によるオムニバス科目で、小生は疫学研究を担当しました。昼夜開講で、昼は9:00から11:50まで、夜は17:30から20:20まで、同じ内容の授業を1日に2回行うという時間割でした。授業要項の授業計画・内容には記述疫学、分析疫学、介入研究、疫学研究に関する倫理指針などを列記しましたが、授業ではこれに加えて、大学院生用パソコンに入っている統計ソフトSPSSの使い方も説明しました。

大学院生の背景は大学からのストレート組4人、社会人21人で、社会人には本学の教員4人が含まれています。年齢も20歳代から50歳代と変化に富んでいます。

このように様々な背景を持っている学生のクラスで授業を行う場合、授業の焦点をどのレベルに置くかと言うことで頭を痛めることになります。授業開始前にアンケートを取りました。疫学を学んだことがありますか。ある29%、ない71%。統計学を学んだことがありますか。ある79%、ない21%。SPSSを使ったことがありますか。ある12%、ない88%でした。大学院なので、学部教育の上にさらに何かを積み重ねる必要があることは当然ですが、疫学については初めて学ぶ学生が71%ですので、ここに焦点を当てざるを得ないと思い、入門編から解説することにしました。

SPSSの出力の内容を理解するには統計学を一通り勉強する必要があります。79%の学生が統計学を学んだことがあるので、残りの21%の学生についてはきついものがあるかもしれないと思いつつも、確率論に基づき、出力の解説をしました。

「疫学研究に関する倫理指針」については人権の尊重、個人情報の保護、インフォームド・コンセントについて概略説明しましたが、十分時間が取れなかったことから、レポートの課題（疫学研究

におけるインフォームド・コンセントの意義）としました。研究における倫理的配慮は今後ますます重要になるものと思います。研究費の申請書や本学の卒論の評価にも倫理的配慮が重要視されています。このレポートで成績評価をしました。文部省・厚生労働省の「疫学研究に関する倫理指針」を丸写ししたレポートの点数は低く、自分の感想や将来の心構え等を述べているレポートの点数は高くなりました。他の教員の評価と合算した評価は全員合格であったと聞いています。

「大学院は学生も教員も初めてなので」双方とも苦労があったと思います。特にフルタイムの社会人の場合は、17:00に仕事が終わって17:30からの授業に出席するわけで、苦労が多かったものと思います。後期は雪が降ります。交通渋滞で遅れることもあるでしょう。また、2年次からは修士論文のための特別研究が始まります。1年はあっという間に過ぎます。特にフルタイムの社会人の場合は今から研究計画を立て、研究に専念できる時間を確保する心構えが必要でしょう。2年次は授業がほとんどなくなりますから、研究に専念できるわけですが、17:00に仕事が終わってから研究するというのでは不十分です。

先日、平成16年度大学院入学者選抜試験の合格発表がありました。8割くらいが社会人とのことで、来年も今年と同じ風景が見えてきます。



地域保健活動学特論（後期授業）の一場面

バドミントンサークル

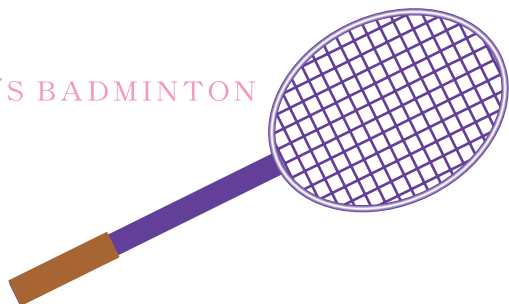
看護学科2年 藤田 真実
(顧問/鳴井 ひろみ講師)

Let's ばどう!!

バドミントンサークルです！バドミントンという呼称が長いので“ばどう”と勝手に略させていただきます。私たちは日ごろの授業で溜め込んだストレスを球の一球一球に込めながら、ばどうしています。主に活動時間は授業終了後となっています。それぞれ個人個人があいた授業時間や休みの日を使って、楽しんでいます。部活動のように本格的な集合をして、合同で試合を行ったりは皆の都合もあり実施できていないのですが、誰もが気まぐれに、そしてひょいと立ち寄って一汗かけるようなサークルを目指してがんばっています。ばどうを通して先輩と知り合えたり、それによって過去問題を入手したりと、情報交換の場にもなっている気がしますが、先輩の皆さんも大変やさしい方なので、サークルへ行く・・・という目的もあるのですが、先輩に会いに行く・・・という目的の人も何名かいることもまた事実です。

これから寒い冬の時期です。体脂肪がつきやすく、それがまた気になりだす今日この頃。ちょっと私的なのですが、ストレス発散に加えてダイエット効果も期待しつつ、ばどうをしていきたいと思っています。学生から一般の方まで、運動で絆を深め合えればいいと思っているバドミントンサークル代表の願いでした。欲を言うなら、もっと積極的に体育館に顔を出し、試合形式で楽しんでいけたらいいなと考えています。

LET'S BADMINTON



イベント創作サークル 最遊記

理学療法学科3年 藤井 光代
(顧問/三浦 雅史講師)

3学科をかき混ぜろ！

「馬鹿なことも、マジメなことも真剣に」をテーマで立ち上げて約2年。これまで様々な企画を提供してきました。ディベート、車椅子屋外実習、止血・テーピング実習、ダイエット企画、スクューバダイビングなどなど。実は、先に挙げたテーマのほかにもうひとつ最遊記のテーマがあります。それは、「3学科をかき混ぜろ！」というもの。どの学生に質問しても、本大学で他学科がどのような授業や実習をやっているのかを詳しく知っている学生は皆無であろう。なぜならチーム医療を教える立場の大学自体がチームになっていないからだと思えます。それならば、学生主体で行動を起こすしか道はない。私たちのお粗末な企画では、どれほどの影響もないかもしれない。しかし、少しでも多くのひとたちが互いに興味を抱けるきっかけになればと思い様々な企画を提供しています。

この場をかりて企画に参加してくれているみんなにひとこと。「どうもありがとう。」特に副責任者としてがんばってくれている葛西奈菜子さんには心から感謝しています。

3年生は今年の12月には企画の中心から外れることとなりますが、新しい力が着実に育っていると確信しています。これからは、次世代のスタイルで3学科をかき混ぜていってほしいと願っています。10年の後も、最遊記が本大学の嵐でありますように。





人間総合科学演習ゼミ論集紹介

人間総合科学科目主任教授 松江 一

人間総合科学演習は、本学の学生に将来保健医療、福祉の現場で先導的役割を担ってもらうための第一歩として、入学直後のフレッシュな新入生に対して用意した他大学に類を見ない特色あるプログラムの一つである。その概要は次のようなものである。まずは自然科学から人文社会科学まで幅広い分野の教官がアシストのため配置され、それぞれの分野のテーマの中から、学生の個々の興味に基づいてテーマを選択する。その後、実際の事例を聞いたり、現場を訪問したり、グループを作り役割を分担、自己のテーマを調査、ディスカッション、目次やストーリーの構成、図や表の作成及び配置、読み合わせ、校正等の手順を経て最後に論文を提出する。選択テーマは人間の根源に関わる問題、環境問題、食と健康、国際問題、民族問題、地域文化の問題、芸術の創造性の問題、国際言語としての英語、アフリカについて、その他現代人が直面する様々な課題が取り上げられている。そして本ゼミの成果は、毎年、ゼミ論文集としてまとめられ、今年も『ゼミ論集第五巻』が成果として出版されます。是非一度閲覧くださり忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。



学内研究者著書紹介

【人間総合科学科目】

○羽入辰郎

マックス・ウェーバーの犯罪—『倫理』論文における資料操作の詐術と「知的誠実性」の崩壊—
ミネルヴァ書房 2002年9月30日発行

【看護学科】

○ライダー島崎玲子・大石杉乃（編著）

戦後日本の看護改革—封印を解かれたGHQ文書と証言による検証—
日本看護協会出版会 2003年9月1日発行

○中村恵子（監修・執筆）

Nursing Selection 10 救急ケア
学習研究社 2003年8月5日発行

○新道幸恵

新体系看護学第30巻 母性看護学(1) 母性看護概論・母性保健／女性のライフサイクルと母性看護（編集・執筆）
メヂカルフレンド社 2003年1月16日発行

新体系看護学第31巻 母性看護学(2) 妊婦・産婦・褥婦・新生児の看護（編集・執筆）
メヂカルフレンド社 2003年1月16日発行

助産学講座8 助産管理 第3版（編集協力・執筆）
医学書院 2003年3月1日発行

人事異動のお知らせ

<新任紹介>



看護学科 助手

早川 ひと美

(ハヤカワ ヒトミ)

生まれは滋賀です。10年間の東京生活を経て青森に来ました。青森の雪は滋賀とは比べ物にならないらしく、タイヤ交換以外にワイパーの交換が必要なることを知りびっくりしています。初体験を重ねて青森生活を楽しみたいと思っています。



理学療法学科 助手

松谷 綾子

(マツヤ アヤコ)

神戸よりやってきました。業務、生活には慣れてきましたが、今の最大の不安は、雪です。雪道を歩くのはいいのですが、運転するのはまだまだ初心者レベルです。また、初心者マークつけようかと思っています。

<昇任等>

社会福祉学科 助教授 千葉 多佳子

<退職>

杉若 裕子 (看護学科助手)

編集後記

早いもので、開学から5度目の冬を迎えました。2003年は選挙の年でしたが、本学においても、大学院修士課程のスタート、新しいカリキュラムでの教育実施、第1回青森県立保健大学学術研究集会の開催、第1回体育祭の開催など変革があった年でした。また、第一期生が卒業し、実習病院や県内外の病院等で元気に生き生きと働いている姿を見かけ、とても嬉しい気持ちになりました。教員をしていてよかったと思う瞬間です。第二期生もこれから卒業を迎えるまで、就職、進学、国家試験などまだまだ課題がありますが頑張ってほしいと思います。

さて、新しいメンバーで編集した「活彩！保健大学だより」はいかがだったでしょうか。皆様からの忌憚のないご意見をいただき、より良いものにしていきたいと考えています。また、記事として取り上げてほし

い情報がありましたら、是非広報委員会にお知らせくださるようお願いします。

最後に、お忙しい中、原稿を担当していただいた方々には深く感謝申し上げます。

(広報委員／吹田夕起子)

◎広報委員会委員

勘林秀行、赤坂和雄、吹田夕起子、鳴井ひろみ、吉川公章、竹澤裕之

◎記録専門部会

工藤乃理子、高橋佳子、桜木康弘、八戸宏

◎広報担当事務局

其田工 (対外広報担当)

山本アユ子 (広報委員会事務担当)

根市茂美路 (学内広報誌、広報委員会事務担当)

編集・発行／青森県立保健大学広報委員会 (〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2007)

バックナンバーはURLをご覧ください。 URL /http://www. auhw. ac. jp/